

ヨハネ4章10 - 14節における ὕδωρ ζωῆν の表象機能と解釈

小林高德

(東京基督教大学教授)

はじめに 61

I 「新鮮な水」とその隠喩 62

II 旧約聖書と初期ユダヤ教文献における(新鮮な)水と渇きの充足の隠喩 65

- 1 旧約聖書
- 2 中間時代以降の初期ユダヤ教文献
- 3 その他の関連文献
- 4 まとめ

III ヨハネ4章13, 14節 73

- 1 「神の賜物」と ὕδωρ ζωῆν の密接な関係
- 2 πηγή ὕδατος ἀλλομένου εἰς ζωὴν αἰώνιον
- 3 ヨハネ4章の物語展開と水の隠喩

結語 80

はじめに

ヨハネ4章10節において、ユダヤ人であるイエスがサマリア人である自分に水を求めたことをいぶかしがるサマリアの女性に、イエスは次のように答える。

「もし、あなたが神の賜物を知り、

『わたしに水をください。』と言ったのが誰であるかを知っていたなら、あなたは彼に求め、

彼はあなたに新鮮な水 (ὕδωρ ζῶν) を与えたことだろう。(私訳)

ここでは明らかに、「神の賜物」(τὴν δωρεάν τοῦ θεοῦ) とイエスのアイデンティティー (τίς ἐστίν) が焦点となっている。イエスのアイデンティティーと深いかわりかで、彼がὕδωρ ζῶν の付与者であるという主張がなされる。それを受けてのサマリアの女性の反応は、ある種の驚きを表すものであった。「先生。あなたは汲むものを持っておいでにならず、この井戸は深いのです。それで、その新鮮な水とやらを、どこから汲むのですか (πόθεν οὖν ἔχεις τὸ ὕδωρ τὸ ζῶν;)。」(4章11節) 女性の問いの冠詞を付した強調形には皮肉が込められていると指摘される⁽¹⁾。

この後の対話で明らかになるように、イエスが意図しているのは、この女性が誤解したヤコブの井戸の水ではなく、永遠のいのちに流れ出る水のことであった(14節)。ここには、ニコデモとの対話においても用いられた、イエスの啓示と対話者の誤解というモチーフが繰り返されている。伝統的には多くの註解者が、イエスが霊的な真理を語っているのに、彼女は文字通りの水を考えていると理解し、そこにサマリアの女性の誤解の原因を求める。さらにその中でも J. Ashton, M.G.W. Stibbe, C.S. Keener は、この表現が 'running water' (流れる水) と 'living water' (生ける水) という二通りの意味 (*double entendre*) に解釈することができると理解する⁽²⁾。確かに、この女性が実際の水を意識していたのに対し、イエスは比喩的な意味での水を意図していたことは文脈より明らかである⁽³⁾。

本稿では、まず第一に、ὕδωρ ζῶν の意味を、旧約聖書と初期ユダヤ教文献にお

(1) T. Okure, *The Johannine Approach to Mission: A Contextual Study of John 4:1-42* (WUNT 2/31; Tübingen: J.C.B. Mohr [Paul Siebeck], 1987), 99.

(2) J. Ashton, *Understanding the Fourth Gospel* (Oxford: Clarendon Press, 1991), 219; M.W.G. Stibbe, *John. Readings: A New Biblical Commentary* (Sheffield: JSOT Press, 1993), 64; C. S. Keener, *The Gospel of John. A Commentary* (Peabody, MA: Hendriksen, 2003), 1.604.

ける用例の解釈の比較の視点から探ることによって、ヨハネ福音書の物語論的解釈において頻繁に援用される、いわゆる *double entendre* (二通りに解釈されうる表現) と誤解のモチーフの是非を問う。その作業をとおして、ヨハネ福音書における中心的な弁証の手法の一側面としての表象表現の役割を明らかにしたい。第二に、10節の ὕδωρ ζῶν の詳細な解説である14節の τὸ ὕδωρ ὃ δῶσω αὐτῷ γενήσεται ἐν αὐτῷ πηγὴ ὕδατος ἀλλομένου εἰς ζωὴν αἰώνιον について、その意味を明らかにしたい。その結果として、ヨハネ4章の物語においてサマリアの女性は、ὕδωρ ζῶν が「新鮮な水」を意味することからヤコブの井戸の水を指すと誤解したのに対して、イエスは一貫して水を隠喩として用いる旧約聖書の伝統に立っていることが明らかになろう。さらに、第四福音書全体（特に、7章19節）およびヨハネ4章の文脈から判断して、イエスの用いた ὕδωρ ζῶν を聖霊を指す隠喩と見なすことの妥当性を検討したい。

I 「新鮮な水」とその隠喩

まず最初に指摘されなければならないのは、ギリシア語表現 ὕδωρ ζῶν 自体に 'living water' (生ける水) と 'running water' (流れる水) という2つの異なる意味合いを見出すことは困難であるという点である。R. Bultmann は、ヨハネ4章10節を1章4節 (ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν) と結びつけて解釈し、次のように言う。"Clearly, then, ὕδωρ ζῶν really means 'life-giving water', corresponding to the meaning of ζωή, which it had when predicated of the Revealer."⁽⁴⁾ さらにヨハネ6章35節の註解では、ζῶν は4章10節と同様、"making alive, quickening" があるとブルトマンは主張する⁽⁵⁾。確かに、6章35節の最初のイエスの自己啓示は、自らを直前の6章33節 (ὁ γὰρ ἄρτος τοῦ θεοῦ ἐστὶν ὁ καταβαίνων ἐκ τοῦ οὐρανοῦ καὶ ζωὴν διδοὺς τῷ κόσμῳ) で言われた神が民に

(3) ヨハネ福音書における表象の研究の有益な要約については、R. Zimmermann, "Imagery in John: Opening up Paths to Tangled Thicket of John's Figurative World," J. Frey et al. ed., *Imagery of the Gospel of John. Terms, Forms, Themes, and Theology of Johannine Figurative Language*. (WUNT 2.200 Tübingen: Mohr Siebeck, 2006), 1-43を参照されたい。

(4) R. Bultmann, *The Gospel of John: A Commentary* (Louisville: Westminster John Knox Press, 1971), 186.

(5) Bultmann, *John*, 227, n.1.

与えたマナに同定するもので、「いのちのパン」には、「いのちを与えるパン (life-giving bread)」の意味があることが明示されている。しかし ὕδωρ ζωοποιῶν であればまだしも、4章19節の ὕδωρ ζῶν 自体に、「いのちを与える水」という意味はない。そのことは、この語句の旧約聖書の背景を見るとときに明確になる。

七十人訳聖書で、ヨハネ4章の背景であるヤコブの井戸の掘削の記事を扱った創世記26章19節の ὕδωρ ζῶν は、**מַיִם חַיִּים** の翻訳である。

創世記26章19節

マソラ本文：**וַיִּחְפְּרוּ עֲבָדֵי יִצְחָק בְּנַחַל
וַיִּמְצְאוּ שָׁם בְּאֵר מַיִם חַיִּים:**

七十人訳：*καὶ ὕρυσαν οἱ παῖδες Ἰσαακ ἐν τῇ φάραγγι Γεραρων
καὶ εὗρον ἐκεῖ φρέαρ ὕδατος ζῶντος.*

和訳：*イサクのしもべたちが谷間を掘っているとき、
そこに湧き水の出る井戸を見つけた。(新改訳)*

他に ὕδωρ ζῶν が **מַיִם חַיִּים** の訳として用いられる例は、民数記19章17節(新改訳「湧き水」、新共同訳「新鮮な水」)では穢れのきよめの祭儀の文脈で、レビ記14章5、50節ではツァラトのきよめの儀式の文脈に見られる。また、雅歌4章15節では神の隠喩として用いられ、ゼカリヤ14章8節では終わりの時の幻としてエルサレムから東西に流れ出る水についての言及に見られる。他方、エレミヤ記2章13節、17章13節では **מַיִם חַיִּים מְקוֹר** のギリシア語翻訳として ζῶν の分詞形は用いられず、それぞれ πηγῆν ὕδατος ζῶντος と πηγῆν ζῶντος である⁽⁶⁾。後者はヨハネ黙示録21章6節 ἐγὼ τῷ διψῶντι δώσω ἐκ τῆς πηγῆς τοῦ ὕδατος τῆς ζῶντος δωρεάν (黙示録22章17節も参照)にも見られ、ヘブライ語の **מַיִם חַיִּים מְקוֹר** に呼応している。ギリシア語文法上、属格 ζῶντος は attributive として ὕδωρ を修飾しており、分詞の場合と意味上の大きな差異はない⁽⁷⁾。

以上から、ヨハネ4章10節でイエスが用いた ὕδωρ ζῶν は、ヤコブの井戸か

(6) 注目に値するのは、ヨハネ4章で井戸に言及する際、11、12節でのサマリアの女性の発言には、創世記26章19節と同様に φρέαρ が使われ、著者によるヤコブの井戸への言及も(6節)もイエスの発言においても πηγῆ が用いられている点である。

(7) ヨハネ福音書では ὕδωρ ζῶντος は使われていない。しかし、ヨハネ6章35、48節では名詞の属格(ὁ ἄρτος τῆς ζῶντος)が使われているのに対して、6章51節では分詞形(ὁ ἄρτος ὁ ζῶντος)が使われる。ペシッタ訳(לחמא חיא, לחמא דחיא)とシリア語訳(لحماء حيا)では、冠詞の有無は別として同一の訳語が使われていることから判断すると、セム語的な表現として両者の区別は意識されていないと言える。同様のことが、ὕδωρ ζῶν にも言えるであろう。

ら汲むことができた新鮮な水を指す、創世記26章19節などの用例を反映したものであるということが出来る⁽⁸⁾。新鮮な水または湧き出る水を指す מַיִם חַיִּים に呼応する ὕδωρ ζῶν 自体には、二重の意味はないのである。そうであるならば、どうして汲むものがなくて井戸も深いのにヤコブの井戸から新鮮な水を汲むのかと言うサマリアの女性の困惑(ヨハネ4章11節)も、故なきことではない。それは、この女性はヤコブの井戸に‘running water’(流れる水)があるとイエスが言ったと誤解して当惑したからではない。むしろ、彼女の当惑は、彼女がこの表現を直截的に(ヤコブの井戸の)「湧き出る水」または「新鮮な水」を指すと誤解したのに対して、イエスは一貫してこの表現を隠喩として用いていたことに由来する。ここには、ヨハネ福音書に特徴的なアイロニーを生む文学構造がある⁽⁹⁾。その文学構造の枠組みは、ヨハネ3書12節にあるように、隠された(終わりの時の救いに関する)神の計画を指示す「天井のこと」(τὰ ἐπουράνια)が、地上の現象(τὰ ἐπίγεια)を用いて表現された παροιμία (譬え)⁽¹⁰⁾で示されるという、ユダヤ教黙示文学において好んで用いられた啓示の手法に由来する⁽¹¹⁾。地上の事象を示す表現「新鮮な水」が、終末的祝福のリアリティーを指し示す隠喩として使われている。

イエスはヨハネ4章13-14節aで、彼が与える ὕδωρ ζῶν はヤコブの井戸から(ἐκ τοῦ ὕδατος τούτου)汲む水ではないことを明らかにする。さらに14節では、イエスの与える水はヤコブの井戸の湧き水とは異なる、終末的祝福としての「永遠のいのち」とかわりのあることが明らかになる。しかしながら、14節のイエスの説明にもかかわらず、サマリアの女性は15節で、涸れることのない新鮮な水をイエスが奇跡的に与えると誤解する。その誤解の理由は、ὕδωρ ζῶν の指示対象に関する理解がサマリアの女性とイエスとで異なるからである。

(8) サマリアにおいても、穢れのきよめの祭儀に用いられる新鮮な水として ὕδωρ ζῶν が理解されたと推察できる。Koester, *Symbolism*, 168 参照。

(9) R. A. Culpepper, *The Anatomy of the Fourth Gospel. A Study in Literary Design* (Philadelphia: Fortress Press, 1983), 166-67.

(10) ヨハネ福音書では παραβολή は用いられないが、それに代わって παροιμία (ヨハネ16:25以下) が מִשְׁלָּה の翻訳として用いられている。Παροιμία については, Zimmermann, “Imagery,” 9-15 にその研究史が要約されている。

(11) ヨハネ3:12と第4エズラ書4:10-11など。

II 旧約聖書と初期ユダヤ教文献における (新鮮な) 水と渴きの充足の隠喩

本来「新鮮な水」を指す ὕδωρ ζωῆς が隠喩として用いられる例は、旧約聖書だけでなく初期ユダヤ教文献にも見られ、特に後者では律法=知恵を示す表象表現としても用いられていることがよく知られている⁽¹²⁾。しかし以下の考察から、ヨハネ4章の ὕδωρ ζωῆς の隠喩は、初期ユダヤ教文献、特に黙示文学によるその終末論的展開とは並行関係にあるものの、内容的には律法や知恵を指すのではなく、むしろ、神が与える終末における祝福や聖霊の付与を指す旧約聖書の預言書の伝統に立つことが明らかになる。

1 旧約聖書

旧約聖書には、一方で、主なる神が新鮮な水 ὕδωρ ζῶν の源として描かれる例が見られる。雅歌4章15節では、神ご自身が新鮮な水の井戸に喩えられる。

מַעַן גַּיְמִים בְּאֵר מַיִם חַיִּים וְנַזְלִים מִן־לְבַנּוֹן:

πηγή κήπων φρέαρ ὕδατος ζῶντος καὶ ῥοιζοῦντος ἀπὸ τοῦ Λιβάνου

あなたは多くの庭を潤す泉、レバノンから伏流する、新鮮な水の井戸。

エレミヤ記2章13節では、神が「湧き水の泉」(מְקוֹר מַיִם חַיִּים 七十人訳: πηγήν ὕδατος ζωῆς) に喩えられ(黙示録21章6節参照)、エレミヤ17章13節では、「いのちの水の泉」(מַיִם-חַיִּים מְקוֹר 七十人訳: πηγήν ζωῆς) と描かれる⁽¹³⁾。詩篇36篇8節では、礼拝者たちは喜びの川から飲むと比喩的に描写される。詩篇36篇9節では、主のそばにはいのちの泉がある(מְקוֹר מַיִם חַיִּים 七十人訳: ὅτι παρὰ σοὶ πηγή ζωῆς) と言われる(シラの書21章13節参照)。イザヤ49章10節では、主の僕がもたらす終末的祝福が、飢えや渴きからの解放として、また、主の僕が民を「水の泉」に導くこととして比喩的に表現される⁽¹⁴⁾。

イザヤ49章10節

לֹא יִרְעָאבוּ וְלֹא יִצְמָאוּ

(12) Keener, *John*, 1.602-3, 440-41 参照。

(13) πηγήν ζωῆς は、מְקוֹר מַיִם חַיִּים の訳語として七十人訳聖書の箴言に多く使われる(箴言10章11節, 14章27節, 16章22節)。箴言18章4節では מְקוֹר に呼応している。

(14) G. Schimanowski, *Weisheit und Messias. Die jüdischen Voraussetzungen der urchristlichen Präexistenzchristologie*. (WUNT 2.17 Tübingen: Mohr Siebeck, 1985), 162-63.

וְלֹא־יִכָּם שָׂרָב וְשִׁמְשֵׁי
כִּי־מִרְחֲמֵם יִנְהַיֵּם

עַל־מִבְּוֵי מַיִם יִנְהַלֵּם:

οὐ πεινάσουσιν οὐδὲ διψήσουσιν

οὐδὲ πατάξει αὐτοὺς καύσων οὐδὲ ὁ ἥλιος

ἀλλὰ ὁ ἑλεῶν αὐτοὺς παρακαλέσει

καὶ διὰ πηγῶν ὑδάτων ἄξει αὐτοῦς

彼らは、飢えず渴かず、

熱も太陽も彼らを打たない。

彼らをあわれむ者が彼らを導き、

水の湧くところに連れて行くからだ。 (新改訳)

他方、ゼカリヤ記 14 章 8 節では、終末における救いの日には、エルサレムから「新鮮な水」が東と西に流れ出ることが預言される。

καὶ ἐν τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ ἐξελεύσεται ὕδωρ ζῶν (מַיִם־חַיִּים)

ἐξ Ἱερουσαλημ

τὸ ἥμισυ αὐτοῦ εἰς τὴν θάλασσαν τὴν πρώτην

καὶ τὸ ἥμισυ αὐτοῦ εἰς τὴν θάλασσαν τὴν ἐσχάτην

καὶ ἐν θέρει καὶ ἐν ἔαρι ἕσται οὕτως.

その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て、

その半分は東の海に、

他の半分は西の海に流れ、

夏にも冬にもそれは流れる。

ここでは、主が全地の王となることを描いた幻において、終末における祝福が、高く上げられたエルサレムから東西に流れ出る新鮮な水の川によって示されている。王なる神が終末の祝福の源であると見なされていることは疑いえない。

特に重要なのは、水の隠喩が預言書において終末の祝福のしるしとしての聖霊が注がれることを示すのに用いられることである (イザヤ 32 章 15 節以降、エゼキエル 36 章 25, 27 節)。イザヤ 44 章 3 節における同義的並行法では、終末的祝福としての水の注ぎは聖霊の付与と等置されている。

כִּי אֶצְקֶמְאִים עַל־צִמָּא וְנִזְלִים עַל־יְבֹשֶׁה

אֶצְקֶ רוּחִי עַל־יְרֻעָה וּבִרְכָתִי עַל־צִאֲצָאִיךָ:

ὅτι ἐγὼ δώσω ὕδωρ ἐν δίψει τοῖς πορευομένοις ἐν ἀνύδρω

ἐπιθήσω τὸ πνεῦμά μου ἐπὶ τὸ σπέρμα σου
καὶ τὰς εὐλογίας μου ἐπὶ τὰ τέκνα σου
わたしは潤いのない地に水を注ぎ、
 渴いた地に豊かな流れを注ぎ、
わたしの霊をあなたのすえに、
 わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう。

また、エゼキエル 47 章 9 節では、終末における神殿から流れ出る川の水が全てのものにいのちを与えるという預言が記される。

以上のように、旧約聖書において水は、神ご自身の隠喩として、また、終末における祝福として神に由来するいのちの特別な祝福を表す隠喩として、また、終末における聖霊の付与との関わりで用いられている。これらはヨハネ 4 章の用例と近似しており、以下に見るような、水の隠喩が律法=知恵を示す初期ユダヤ教文献に頻出する用例とは一線を画している。

2 中間時代以降の初期ユダヤ教文献

中間時代において水は、律法や知恵の隠喩として用いられる。シラの書で神の知恵は、水の流れに喩えられる (15 章 3 節, 24 章 25, 30 節)⁽¹⁵⁾。

シラの書 15 章 3 節

ψωμιεὶ αὐτὸν ἄρτον συνέσεως
καὶ ὕδωρ σοφίας ποτίσει αὐτόν
知恵は、彼を理解のパンで養い、
 彼に知恵の水を注ぐ。

特に注目に値するのが、シラ 24 章 19 - 21 節で知恵としての律法⁽¹⁶⁾ から飲むことがさらなる渴きを生むと言われていることである。

シラの書 24 章 21 節

οἱ ἐσθίοντές με ἔτι πεινάσουσιν
καὶ οἱ πίνοντές με ἔτι διψήσουσιν⁽¹⁷⁾
私から食べる者はまた飢え、
 私から飲む者はまた渴く。

(15) J.T. Sanders, *Ben Sira and Demotic Wisdom* (Chico, California: Scholars Press, 1983), 16-17.

シラの書24章19節で、知恵はそれを願う人々に「私を願い求める者よ、私に来て、私の実りで満たされよ (προσέλθετε πρὸς με οἱ ἐπιθυμοῦντές μου καὶ ἀπὸ τῶν γεινημάτων μου ἐμπλήσθητε)。」と呼びかける。この知恵の呼びかけは、仮庵の祭りの最後のイエスの呼びかけを彷彿とさせる：「だれでも渴いているなら、わたしのもってきて飲みなさい (ἐάν τις διψᾷ ἐρχέσθω πρὸς με καὶ πινέτω)」(ヨハネ7章37節。また黙示録22章17節も参照)。P.W. Skehan は、シラの書24章21 - 22節は、箴言8章35 - 36節に基づいて書かれていると言う⁽¹⁸⁾。「なぜなら、わたしを見いだす者は、いのちを見いだし、主から恵みをいただくからだ」(箴言8章35節)。この箴言の表現は、自身が与える ὕδωρ ζῶν による渴きの充足を説くヨハネ4章14節a (6章35節 καὶ ὁ πιστεύων εἰς ἐμὲ οὐ μὴ διψήσει πώποτε 参照) のイエスのことばと類似している。それと対照的に、知恵から飲む者はさらに渴きが増すというシラの書の理解には終末論的展開が欠如しており、代わって、契約に基づく律法の遵守が推奨されている。

死海文書も、律法を水の表象を用いて描く。ダマスコ文書では、民数記21章17節のモーセの井戸を律法であると解釈し、その井戸を掘ったのはユダの地を離れダマスコに住むイスラエルの契約の民であると記す (CD VI.2 - 5)⁽¹⁹⁾。

しかし神は先祖たちとの契約を思い起こし給うた。

(16) シラの書24章23節では知恵と契約の書としての律法が等置される (15章1節、19章20節、33章2節も同様)。J.G. Snaith, *Ecclesiasticus, or the Wisdom of Jesus Son of Sirach*. Cambridge Bible Commentary (London: Cambridge University Press, 1974), 123 参照。シラの書24章23節は、律法とイスラエルの歴史における知恵の働きに言及する申命記33章4節 (「モーセは、みおしえを私たちに命じ、ヤコブの会衆の所有にした。」) に依拠しており、律法と知恵が等置されている。G.T. Sheppard, *Wisdom as a Hermeneutical Construct. A Study in the Sapientializing of the Old Testament* (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1980), 63-66; J. T. Sanders, Ben Sira, 49-50 参照。両者に密接な関係はあっても、律法と知恵が等置されているわけではないと言う説については、J. Cook, "The Law and Wisdom in the Dead Sea Scrolls with Reference to Hellenistic Judaism," in F. G. Martinez, *Wisdom and Apocalypticism in the Dead Sea Scrolls and in the Biblical Tradition* (Leuven: University Press, 2003), 324-28 参照。

(17) J. Ziegler, ed., *Sapientia Iesu Filii Sirach*. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980), 239.

(18) P.W. Skehan, 'Structures in Poems on Wisdom: Proverbs 8 and Sirach 24'. *CBQ* 41 (1979), 365-79.

(19) Koester, *Symbolism*, 170 参照。

そしてアロンから知恵ある人びとを、イスラエルから知恵ある人びとを立てて、彼らに聞かせ給うた。

それで彼らは井戸を掘ったのである。

すなわち、「笏を以て、つかさたちが掘り、民の長たちが穿った井戸」(民数記21章18節)である。

この井戸はすなわち律法である (הבאר היא התורה)⁽²⁰⁾

それを掘った者とはイスラエルの咎を離れ、

ユダの地から出てダマスコに寄寓した人びとである。

ここでは律法の井戸を掘る者たちは「知恵ある人びと」と呼ばれるだけでなく、続く文脈では律法の解釈者と呼ばれ、知恵と密接な関係にある律法が井戸と呼ばれている (CD VI.7)⁽²¹⁾。

同様にフィロン (『覚醒』1.112-13, 『夢』2.271) も、モーセの井戸から湧き出る水を、律法を通して与えられる「神の知恵」であると描く。『夢』2.242では、神的な言葉 (ロゴス) が知恵という泉から川のように流れ出ると表される。

神的な言葉 (ロゴス) は、知恵の泉から川のように流れ出る (κάτεισι δὲ ὡσπερ ἀπὸ πηγῆς τῆς σοφίας ποταμοῦ τρόπον ὁ θεῖος λόγος)。それは、パラダイスにあるかのように、地と天の新芽と植物に水と栄養を供給するように人々に愛と美徳を与える。

『逃亡と発見』97では、神的なロゴスは知恵の源であり、そこから飲む者は死に代えて永遠のいのちをみつける、とフィロンは言う。

(神の摂理は) 早く走ることのできる人を、息もつく間もなく、知恵の泉である至高の神的な言葉のもとへ (πρὸς τὸν ἀνωτάτω λόγον θεῖον ὃς σοφίας ἐστὶ πηγὴ) と急がせる。それは、彼がその流れから汲んで、死に代わって永遠のいのちの褒賞をみつけるため (ἵνα…ζωὴν αἰδίου ἄθλον εὕρηται) である。⁽²²⁾

フィロンにおいては、神的ロゴスが知恵の泉にたとえられ、人に永遠のいのちを与えると表現されている。それとは異なり、ヨハネ4章のイエスは、信仰者のうちで永遠のいのちへと湧き出る水の泉となる水の付与者なのであり、フィロンの神的ロ

(20) Ed. F. G. Martinez & E. J. C. Tigchelaar, *The Dead Sea Scrolls. Study Edition*. Vol.1.(Grand Rapids: Eerdmans, 1997), 558-59 参照。

(21) 他にも 1QH8:13-15 では חיים מים が、「聖なる水 (מי קודש)」や「いのちの源 (חיים מוקר)」と等置される例が見られる。

ゴスのように隠喩としての水とは同定されていない点は注目に値する。

また、『律法の寓意的解釈』2.86では、知恵から川が流れ出て、そこから神は神を愛する人々に水を飲ませ、魂の渇きを満たすとフィロンは述べる。

神がご自身の頑強な知恵から水の流れを流れ出させ、疲れた魂の渇きを癒し、変わる事のない健康を与えられるまで (μέχρις αὐτοῦ ὁ θεὸς τῆς ἀκροτόμου σοφίας ἑαυτοῦ τὸ νῆμα ἐπιπέμψη καὶ ποτίσῃ τὴν θεραπείαν ψυχῆν ἀμεταβλήτῳ ὑγείᾳ)。なぜなら、神の知恵は頑強な岩だからである。それは、ご自身の力から神が切り出されたもつとも素晴らしい岩。神を愛する魂がその知恵から飲む。彼らがその水を飲むと、至上のマナによっても満たされる (ἐξ ἧς ποτίζει τὰς φιλοθέου ψυχὰς ποτισθεῖσαι δὲ καὶ τοῦ μάννα ἐμπίπλυνται τοῦ γενικωτάτου)。(私訳)

フィロンと同時代のナザレ人イエスや後のヨハネ福音書の著者との間に直接的影響関係があったと論証することはできない。そればかりか、たとえパレスチナとアレクサンドリアの間に頻繁な交流があったとしても、フィロンの表現が第1世紀のパレスチナに広く知られていたことの論証も不可能である。しかしながら、律法と同一視される知恵を、泉や水の隠喩を用いて表現する伝統は、ヨハネ福音書がキリストを描く際に用いる水の隠喩と類似しており、後者はこのような文脈の中で理解されるべきである。また、前掲のフィロンの作品には、イエスと同時代でありながら、終末論的展望が明瞭ではない点は、ヨハネ福音書との大きな相違として指摘しておく必要がある。

他方、シラの書やフィロンと異なり、紀元1世紀末までに書かれたと考えられる初期ユダヤ教黙示文学では、泉や水の表象は、終わりの日の祝福の一環として、律法や知恵の働きを描くのに用いられる。

エチオピア語エノク書48章1節

その所に、汲めども尽きせぬ義の泉をわたしは見た。また、そのまわりに知恵の泉がいくつもあって、渇ける者はみなそこで飲み、知恵に満たされ、義人たち、聖者たち、選ばれた者たちと住居をともにしていた⁽²³⁾。

(22) この節はヨハネ4章14節に最も類似しているが、両者の相違は明瞭である。フィロンの「神的なロゴス」は、Endoによると“a divine mediator”，または，“a personification of God’s activities” (M. Endo, *Creation and Christology. A Study on the Johannine Prologue in the Light of Early Jewish Christian Accounts* [WUNT 2.149 Tübingen: Mohr Siebeck, 2002], 178) と見なすことができる。

他方、エチオピア語エノク書96章6節では、いのちの泉である律法を守ることをやめた人々の終末における審判について、次のように語られる。

わざわざいなるかな、年がら年中水を飲んでいきみたちは。きみたちは突然報いを受け、干あがり、干からびるであろう。命の泉を棄てたからである⁽²⁴⁾。

シリア語バルク黙示録38章2節では、律法と知恵が同義の並行法において等置されている。

あなた(主)の律法は生命であり、あなたの(賜う)知恵は正しい指標です。39章7節では、メシアの支配が「泉」にたとえられている。

それが没落する最後の時が近づくと、わたしが泉とぶどうの蔓に似せたわたしのメシアの支配が姿を現わすであろう。

77章15-16節では、律法から知恵を得ることによって泉は涸れることがないと言われる。

羊飼いや灯りも泉も全ては律法が源である。私たちが去っても、律法は残る。それゆえ、あなたがたが律法に依り頼み、知恵を求めるならば、灯りは消えることなく、羊飼いは見捨てず、泉は涸れることがない。⁽²⁵⁾

以上のように、初期ユダヤ教黙示文学において水の隠喩によって示される律法＝知恵のモチーフは、終末論的展開を見せる。水の隠喩の終末論的展開はヨハネ4章14節にも当てはまり、そこに示されたイエスの言葉が初期ユダヤ教黙示文学との対比で理解されるべきことを示唆している。

3 その他の関連文献

それに対して、後代に書かれたラビ的ユダヤ教文献やサマリア教団の中心的神学文献においては、終末論的観点は希薄である。紀元4世紀末から9世紀にかけて書かれた⁽²⁶⁾と考えられるサマリア教団の *Memar Marqah* 6:3には、モーセの口は

(23) エチオピア語エノク書の和訳は、村岡崇光訳(『聖書外典偽典 第四巻 旧約聖書偽典II』教文館、1975年)に従った。E. Isaac, "1 (Ethiopic Apocalypse of) Enoch. A New Translation and Introduction", J. H. Charlesworth, ed., *The Old Testament Pseudepigrapha* (New York: Doubleday, 1983), I. 5-89も参照。

(24) この箇所には反キリスト教的弁証が含意されているかもしれない。

(25) A. F. J. Klijn, "2 (Syriac Apocalypse of) Baruch. A New Translation and Introduction", J. H. Charlesworth, ed., *The Old Testament Pseudepigrapha* (New York: Doubleday, 1983), I. 615-52より和訳。

ユーフラテスの水の流れのようだという隠喩が使われ、2:1では律法が「そのような預言者は人類の中からは出ていないが、その預言者（モーセ）によって掘られた井戸で、それは神の御口から出た水で満ちている。」⁽²⁷⁾と言われるものの、そこには終末論的展開はない。新約時代よりは後になるが、タンナイム時代にも、涸れることのない泉のモチーフは「律法」の隠喩としてラビたちによって用いられた⁽²⁸⁾。

Yalkut Shimoni II.480

「律法の言葉は、(人の心のうちに)受け入れられて、湧き出る泉となる。」ヨハネ4章14節との類似が興味深いが、ここでも終末論的展開は明確ではない。また、これらの文献の後代性のゆえにヨハネ4章の解釈に直接のレリバンズはない。

4 まとめ

「水」は、旧約聖書においては、主なる神を描く隠喩として用いられる一方⁽²⁹⁾、初期ユダヤ教文献において、律法、または、知恵としての律法、またはロゴスを指す隠喩として使われている。その中でも、渇くことのない水に関する隠喩は、シラの手紙やフィロンにおいては未だ終末論的展開を見せていないが、紀元第1世紀に書かれたと見なすことができるユダヤ教黙示文学においては、顕著に終末論的色彩を帯び、終わりの時の祝福を指す律法=知恵による充足を示す表現として用いられている。

他方、第1世紀のサマリア共同体における水の隠喩の用例は確定することができないばかりか⁽³⁰⁾、彼らが教典としたサマリア五書以外の預言書における用例と直接関係があったことも論証することはできない。しかしながら、ヨハネ福音書の第一義的読者にとってはイエスによる ὕδωρ ζῶν への言及は、当時のユダヤ教的理解だけではなく、それと類似していたと想定されるサマリア教団の理解⁽³¹⁾ に対し

(26) Nathan Schur, *History of the Samaritans* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 1992), 75-76 参照。

(27) Koester, *Symbolism*, 170. Keener, *John*, 1.603-4 も参照。

(28) 詳細なリストについては、Keener, *John*, 1.603 n.202; 1.440n. 109 を参照。

(29) 水と関連する語が神の善を示す隠喩として用いられる他の例については、詩篇 87: 7, 104: 10, 107:35, イザヤ 41: 18, 58: 11 等を参照。

(30) 14 世紀の Abisha ben Pinhasn によって書かれた賛美 *Shira Yetima* には、サマリアのメシアである *Taheb* のバケツから水が流れるという記述があることが知られているが、このような理解が第1世紀に遡ることは立証できない。Ng, *Water Symbolism*, 140, n. 154 参照。

て弁証の意味合いを持っていたことは否定できないと思われる。

特に、シリア語バルク書 77 章 16 節では枯れない井戸が終末における律法による満たしの隠喩として用いられている。終末における知恵＝律法が涸れない泉に喩えられることと比較するとき、ヨハネ 4 章 10, 14 節のイエスは、初期ユダヤ教が描く終末的祝福の時代における律法＝知恵に帰される役割を実現する者であることを自己啓示していると理解できる。それ以上に、以下の考察から、ヨハネ 4 章におけるイエスは、神を水の付与者だと描く旧約聖書の伝統に倣って、ご自身を神の位置にしていることが明らかになる。

Ⅲ ヨハネ 4 章 13, 14 節

1 「神の賜物」と ὕδωρ ζῶν の密接な関係

ヨハネ 4 章 13, 14 節において、ὕδωρ ζῶν についてさらに説明が加えられるが、それを理解する際に、10 節におけるこの表現を取り巻く言語構造に注目することには意味がある。R. シュナツケンブルグは、10 節の条件節における並行関係から、「神の賜物」とイエスが誰であるかが密接に結びついていること、また、イエスのアイデンティティーに関する従属節を中心に、キアスムスが形成されていることを主張する⁽³²⁾。

A Εἰ ἤδεις τὴν δωρεάν τοῦ θεοῦ

B καὶ τίς ἐστὶν ὁ λέγων σοι, Δός μοι πεῖν

A σὺ ἂν ἤτησας αὐτὸν καὶ ἔδωκεν ἅν σοι ὕδωρ ζῶν

ここでは τὴν δωρεάν τοῦ θεοῦ と ἔδωκεν ἅν σοι ὕδωρ ζῶν の間に呼応関係を見

(31) 第1世紀における、初期ユダヤ教の律法解釈とサマリア教団の解釈の類似性について、Nathan Schur, *History of the Samaritans*, 74 は次のように述べる。“Till the time of the revolt of Bar Kokhba the differences between the Jewish and the Samaritan Halakah was [sic.] apparently not greater than that between the various Jewish sects themselves”. しかしながら、サマリア五書のうちの数多い異読のうち、七十人訳聖書によって支持される読みだけが紀元1世紀にまで遡りえる解釈であり、信頼できるデータと見なすべきだという指摘も考慮しなければならない。F. Dexinger, “Eschatology”, in A.D. Crown, R. Pummer, and A. Tal, ed., *A Companion to Samaritan Studies* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1993), 86-90 参照。

(32) Schnackenburg, *John*, 1.426.

永遠のいのちへと湧き出る水の泉となるのです。

(私訳)

イエスはご自分が水を与える (13節 b: ἐκ τοῦ ὕδατος οὗ ἐγὼ δώσω αὐτῷ ; 14節: τὸ ὕδωρ ὃ δώσω αὐτῷ) こと、また、その水を飲むものが決して永遠に渴か(διψήσει) ないことについて未来時制形が用いられている。この未来時制形は、復活後に実現する祝福を指し示していると考えられるが、この祝福はサマリアの女性において結実していると理解できる⁽³⁵⁾。

2 πηγή ὕδατος ἀλλομένου εἰς ζωὴν αἰώνιον

すでに II においてヨハネ 4 章 10 節の ὕδωρ ζῶν は、**הַיַּיִם הַחַיִּים** の翻訳であると指摘した。すでに見た水の隠喩に関する旧約聖書の用例から見ると「泉」が用いられるヨハネ 4 章 14 節では、七十人訳聖書で **הַיַּיִם הַחַיִּים מְקַרְרִים** に呼応する πηγήν ὕδατος ζῶντος または πηγήν ὕδατος ζωῆς が予期される。しかしながら、イエスが与える水はその人の内にある「永遠のいのちへと湧き出る水の泉となる (πηγή ὕδατος ἀλλομένου εἰς ζωὴν αἰώνιον)」と終末論的展開をみせる。εἰς ζωὴν αἰώνιον は、ダニエル 12 章 2 節の **עֲרֹבְתָא לְחַיִּי עוֹלָמִי** との呼応を示唆し、終末における神の民に対する永遠の祝福への言及であることは明瞭である (ヨハネ 4 章 36 節では宣教的視点から εἰς ζωὴν αἰώνιον が用いられ、永遠のいのちに至る収穫が進行していることを示唆する)⁽³⁶⁾。

この「新鮮な水」に関するイエスのさらなる解説との関わりで、J. Frey は次のように主張する。すなわち、ヨハネ 7 章 37 - 38 節のイエスの叫びとその解釈 (7 章 39 節) で明らかになる ὕδωρ ζῶν が聖霊を指すように、ヨハネ 4 章においても同様に聖霊を指す、と⁽³⁷⁾。

(35) Frey, *Die johanneische Eschatologie*, III. 270. 同様の説については、J. P. Heil, *Blood and Water. The Death and Resurrection of Jesus in John 18-21*. (CBQMS 27 Washington, DC: The Catholic Biblical Association of America, 1995), 102-3, 108-9 も参照。

(36) ζωὴ αἰώνιος がダニエル 7:12 以降、初期ユダヤ教文献およびラビ文献でどのように用いられたかについては、J. Frey, *Die johanneische Eschatologie*. III. (WUNT 2.117 Tübingen: Mohr Siebeck, 2000), 262-70 を見よ。共観福音書において、ζωὴ αἰώνιος が終末における神の民の祝福として描かれることについて詳細に論じる必要はないであろう (例えば、マルコ 10:17 と並行箇所など多数)。ヨハネ福音書においては、共観福音書と同様、ζωὴ αἰώνιος は神の国と等置されている (ヨハネ 3: 3, 5, 16 等)。

ヨハネ7章27b - 28節

「もしだれでも渴くならわたしのところに来て、わたしから飲みなさい。わたしを信じる者よ。

それは聖書が、『彼〔イエス〕の内部から新鮮な水の泉（(複数)が流れ出る (ποταμοὶ ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ ῥεύσουσιν ὕδατος ζῶντος)』。』⁽³⁷⁾ と言うとおりです。』⁽³⁸⁾

ここで、イエスの内部から (ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ) 流れ出る ὕδωρ ζῶν はイエスを信じる者に、イエスが栄光を受ける十字架と復活後に、与えられようとしていた聖霊を指す (7章39節: τοῦτο δὲ εἶπεν περὶ τοῦ πνεύματος ὃ ἐμελλοὺς λαμβάνειν οἱ πιστεύσαντες εἰς αὐτόν)。確かに、ヨハネ7章から振り返ると ὕδωρ ζῶν が聖霊であるという理解が生まれるが、一見、ヨハネ4章ではそのような明確な同定はなされていないように見える。しかし、以下の考察は、ヨハネ4章の文脈における水と御霊の深い関係を示唆している。

(1) すでにⅢ(1)で見たように、旧約聖書においては、水の表象は神自身や律法だけでなく、聖霊の付与の表現としても用いられていた。さらに、ヨエル書2章28節では、終末における祝福の時代の象徴としての聖霊の授与は、動詞「注ぐ」(נָחַשׁ ἐκχέω)と、水に関する隠喩で表現される。ヨハネ4章14節との関わりで特に重要なのは、「永遠のいのちへと湧き出る水」における「湧き出る」を意味する ἄλλομαι が、七十人訳聖書では、サムソン (師士記14章6, 19節, 15章14節) やサムエル (第一サムエル記10章10節 MT: וַיִּהְיֶה אֱלֹהִים מְרַחֵם עַל הַצֶּהֱרָה 七十人訳: καὶ ἦλατο ἐπ’ αὐτὸν πνεῦμα θεοῦ) に聖霊が下ることを表現する動詞として用いられていることである。第1世紀のサマリア教団において歴史書や預言書の知識が存在したかは定かではないが、旧約聖書に通じた読者にとっては、ここに指摘した水と御霊の関連は自明であっただろう。

(37) Frey, *Die johanneische Eschatologie*, III, 270. アウグスティヌスや他の教父が、新鮮な水を聖霊への言及であると解釈したことはよく知られている。アウグスティヌス『ヨハネによる福音書講解説教1(アウグスティヌス著作集23)』15.17(泉治興・水落健治訳, 教文館, 1993年, 269頁)。

(38) ὁ πιστεύων εἰς ἐμέ はヨハネ7:38bと共に理解されるべき呼格である。また、この聖書引用が詩篇77篇16, 20節(七十人訳)からであり, ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ はイエスの内部からの意味である。この説については, M. J. J. Menken, *Old Testament Quotations in the Fourth Gospel. Studies in Textual Form* (Kampen: Kok Pharos, 1996), 187-203 参照。

- (2) C. R. Koester は次の論点から、ヨハネ4章の ὕδωρ ζῶν は御霊を指すと主張する⁽³⁹⁾。ヨハネ福音書ではすでに、3章5 - 8節において「水と霊によって」生まれること (ἐὰν μὴ τις γεννηθῆ ἔξ ὕδατος καὶ πνεύματος) は、「霊によって」(3章6, 7節: ἐκ τοῦ πνεύματος) 生まれることと置き換えられ、「水」の表象が「霊」によって置換される可能性が示されていた⁽⁴⁰⁾。このことは、物語の展開上、サマリアの女性には理解のしようがない。しかし読者にとっては、イエスとの対話の焦点が ὕδωρ ζῶν から「霊と真理による (ἐν πνεύματι καὶ ἀληθείᾳ)」礼拝に移行したことは明らかであり、3章における両者の関係を想起させる。
- (3) イエスの自己啓示を経験したサマリアの女性が、水がめを残してスカルのの人々へイエスがメシアであることを伝えた宣教(4章28, 29節)は、すでにこの終末的祝福がメシアなるイエスにおいて実現していることを示唆している(4章36節参照)。彼女が求めた涸れることのない飲み水は、イエスの自己啓示の前に意味を失っていたのである。このことは、ヨハネ4章23節の「しかし、時が来ています。今がそうです (ἀλλὰ ἔρχεται ὥρα καὶ νῦν ἐστίν)。その時には、真の礼拝者は御父を霊と真理によって礼拝するのです。」が指し示す、イエスの臨在によってすでに始まり十字架と復活後付与される聖霊において実現する終末的神礼拝のリアリティー⁽⁴¹⁾と呼応する。
- (4) ヨセフスや後代のラビたちが、律法を神からの至高の賜物と見なしたことはすでに触れた。それに対し、新約聖書においては、J. D. M. Dunn が指摘するように、「神の賜物」は聖霊を指す用語として確立していたと考えられる(使徒の働き2章38節, 8章20節, 10章45節, 11章7節, ヘブル人への手紙6:4)⁽⁴²⁾。このような事実に関する知識を著者が読者のうちに想定していたかどうかは分からない。しかしこの指摘は、「神の賜物」は「新鮮な水」としての聖霊を指す

(39) Koester, *Symbolism*, 203. ただし、Koester は十分な論拠を提示していない。また172頁においては、ヨハネ4章における両者の同定が明確ではないために、ὕδωρ ζῶν は霊であること(ヨハネ7:39)は、イエスが女性に ὕδωρ ζῶν を与えると言った時点で予期されていたと述べるだけである。

(40) ヨハネ3:5にはエゼキエル36:25 - 27が反映されていると考えられるが、死海文書においても聖霊は水による清めの儀式と結びつけられていた(1QS IV. 20-21)。

(41) 同じ表現はヨハネ5:25にも表れるが、この解釈については、Hans-Christian Kammler, *Christologie und Eschatologie. Joh 5,17-30 als Schlüsseltext johanneischer Theologie* (WUNT 2.126 Tübingen: Mohr Siebeck, 2000), 158 - 64; J. Frey, *Die johanneische Eschatologie*, III, 379 参照。

という解釈が、新約聖書の他の用例に適っていることが示されたという意味で有意義である。事実、先に見たヨハネ4章10節のキアスムスにおける τὴν δωρεάν τοῦ θεοῦ と ἔδωκεν ἅν σοι ὕδωρ ζῶν の呼応関係は、新鮮な水が初期ユダヤ教のように神の賜物としての律法ではなく、終末におけるエルサレムやゲリジムという地理的場所に縛られない礼拝を可能にする聖霊を指し示しているという結論は妥当である。

以上の考察から明らかなことは、ヨハネ福音書全体の文脈において ὕδωρ ζῶν は聖霊と同定されていることである。このような同定は、他の初期ユダヤ教文献が終末における祝福を律法と知恵との関わりで描こうとしたのに対して、終わりの時の祝福としての聖霊の付与を水の隠喩で表現する旧約聖書の伝統に立っていると言うことができる。すなわち、ヨハネ4章14節には、旧約聖書において神や、終わりの時の祝福の隠喩として水の隠喩を用いた伝統（エレミヤ17章13節：**מַיִם חַיִּים, מַיִם חַיִּים, מַיִם חַיִּים** πηγῆν ζωῆς, 詩篇36篇8節など）とともに、終末における聖霊の付与を水の表象で表現する伝統が色濃く反映されていると言える。それに加えて特徴的なのは、ダニエル書12章2節における終末の祝福としての永遠のいのちへの言及が結び合わされている点である。

3 ヨハネ4章の物語展開と水の隠喩

イエスが用いた水の隠喩に関する以上の論考を、ヨハネ4章の物語の展開との関わりでさらに考察することは有意義であろう。

イエスを「ユダヤ人」（9節）と認識したサマリアの女性に対して、イエスは「神の賜物」としての「いのちの水」の付与者であると言い、自身が誰であることを示唆していた（10節）。13, 14節のイエスの解説を聞いても、サマリアの女性は誤解し、汲みに来なくてもすむイエスが与えた水を求める（15節）。それに対して、彼女の夫を連れてくるようにとのイエスの働きかけは、彼女の度重なる婚姻上の悲劇を映し出し、彼女の真の渇きが明らかになる（16 - 18節）。そのことでイエスを「預言者」（19節）と言ったサマリアの女性のイエス認識は、終わりの時における礼拝の「場」とユダヤ人から出るメシアに関する議論を経て、26節のイエスの自己啓示によっ

(42) J. D. G. Dunn, "A Note on *dorea*," *ExpTim* 81 (1969-70) 349-51. この指摘は、G. M. Burge, *The Anointed Community. The Holy Spirit in the Johannine Tradition* (Grand Rapids: Eerdmans, 1987), 96-99 によった。エペソ4:7(τῆς δωρεᾶς τοῦ Χριστοῦ) もこのリストに加えられるべきであろう。

てクライマックスに達する。それは終末的祝福としての永遠のいのちに至る水の付与者⁽⁴³⁾としてのイエスは、サマリアの女性に「渇き」をもたらした結婚上の悲劇の連続という彼女の個人史上の「全て」（4章39節；18, 25節参照）を知るだけでなく、霊と真理によって神を礼拝する時代を到来させる「メシア」であることを自ら啓示する。

イエスの本質的アイデンティティーが明らかになるのは、ヨハネ4章26節におけるイエスによる自己啓示によってである。4章26節の ἐγώ εἰμι, ὁ λαλῶν σοι について、神の自己啓示を示す אֲנִי הֵנִי の翻訳としての ἐγώ εἰμι であるという理解が広く受け入れられている⁽⁴⁴⁾。その根拠として、①イザヤ52章6節(ἐγώ εἰμι, αὐτὸς ὁ λαλῶν σοι)との類似⁽⁴⁵⁾、および、②ヨハネ4:25の ἀναγγέλλω がイザヤ43:8-13の神の将来の予知を描く文脈で ἐγώ εἰμι とともに使われることが挙げられる⁽⁴⁶⁾。預言書との接点が希薄であったと推定できるサマリアの女性がそのような関連を理解できたかについては疑問が残るが、旧約聖書に通じた読者にとっては、そのような関連を想起することは困難でなかったであろう。さらに、人のうちにあつて永遠のいのちに至る水の井戸となる ὕδωρ ζῶν の付与者という自己啓示からは、イエスが神の位置にご自分を置いていることが明白であり、ἐγώ εἰμι は単に Μεσσίας が補語として省略されているだけではない。

ヨハネ4章のイエスは、サマリアの女性の手桶から水を飲むことを願うことにより、食卓の交わりをすることのなかった(9節: οὐ γὰρ συγχρῶνται Ἰουδαῖοι

(43) L. P. Jones, *The Symbol of Water in the Gospel of John* (JSNTSS 145 Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997), 230 は、いのちの水はイエス自身であると言う。しかしイエスは、いのちのパンについては、ἐγώ εἰμι によって自身と同定するが、水については ἐγώ εἰμι を適用することはない。

(44) Schnackenburg, *St. John*, 1.442; G. R. O' Day, *Revelation in the Fourth Gospel. Narrative Mode and Theological Claim* (Philadelphia: Fortress Press, 1986), 72; A. R. Kerr, *The Temple of Jesus' Body. The Temple Theme in the Gospel of John* (JSNT 220 Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002), 196-97; R. Bauckham, *The Testimony of the Beloved Disciple. Narrative, History, and Theology in the Fourth Gospel* (Grand Rapids: Baker Academics, 2007), 244-48. R. Brown, R. Schnackenburg, C.S. Keener も同様。

(45) D. M. Ball, *'I Am' in John's Gospel. Literary Function, Background and Theological Implications* [JSNTSS 124 Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996], 178-81.

(46) C. H. Williams, *I am He. The Interpretation of ānī-hū in Jewish and Early Christian Literature* (WUNT 2. 113 Tübingen: Mohr Siebeck, 2000), 257-66.

Σαμαρίταις) サマリア人とユダヤ人との間の禁忌を破っただけでなく⁽⁴⁷⁾、両者の共通の伝統であるヤコブの井戸といのちを与える律法の隠喩としての「水」の隠喩を用いることで、ご自身が神なるメシアとして人間の渴望を充足する終末における祝福としての永遠のいのちの付与者であることを啓示した。それは同時に、ユダヤ人とサマリア人を分け隔てていた礼拝の物理的場所(エルサレムとゲリジム)の相違を霊と真実による礼拝(ヨハネ4章23節: ἐν πνεύματι καὶ ἀληθείᾳ)⁽⁴⁸⁾によって乗り越えて、両者がイエスを中心とする食卓の交わりをする信仰共同体となることに道を開くものであった⁽⁴⁹⁾。

結語

以上の論点をまとめると以下のとおりである。ヨハネ4章10節の ὕδωρ ζῶν は、「新鮮な水」または「湧き水」を意味する מַיִם חַיִּים の翻訳である。それゆえサマリアの女性には、ヤコブの井戸の水を指すものと誤解されうるものであった。ὕδωρ ζῶν はそれ自体としては、一般に考えられるように二重の意味を持ってはいない。しかしながら、旧約聖書においては神ご自身が神を起源とする終末における祝福を示す隠喩として、また、初期ユダヤ教文献においては律法や知恵、またはロゴスを指す隠喩として用いられていた。ヨハネ4章における渇くことのない水に関する隠喩は、とりわけ、初期ユダヤ教黙示文学における顕著に終末論的色彩を帯び、終わりの時の祝福としての律法=知恵による充足を示す用例と類似性が高い。ὕδωρ ζῶν がサマリアの女性の誤解を生んだのは、彼女がそれをヤコブの井戸の水と理解したのに対して、イエスは終始一貫してその隠喩としての意味で使っていたためである。

(47) L. P. Jones, *The Symbol*, 98 参照。

(48) 同様の解釈については、Koester, *Symbolism*, 171; Keener, *John*, 1.615-18; Coloe, *God Dwells with Us*, 216; Ng, *Water Symbolism*, 146 等を参照。多くの解釈者が、ἐν πνεύματι καὶ ἀληθείᾳ と τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας (ヨハネ16:13) との並行関係を見て、καὶ ἀληθεία を hendiadys と見なす。

(49) サマリアの女性の夫についての対話から「真の礼拝」への転換は、サマリアの女性の7人の男性庇護者が、カナの婚礼における6つの水がめがユダヤ教の不完全さを示唆するように、神礼拝に関するサマリア教の不完全さを示すという Mary L. Coloe の象徴的解釈は行き過ぎであろう。M. L. Coloe, *God Dwells with Us. Temple Symbolism in the Fourth Gospel* (Collegeville, Minnesota: The Liturgical Press, 2001), 98-99.

他方、ここには、終末における祝福を律法に基づく知恵による充足であると描く初期ユダヤ教黙示文学の主張に対する弁証が意図されていると理解できよう。すなわち、イエスこそ、終末における律法や知恵の体現者にとどまらず、終末における永遠のいのちへと湧き出る水の泉となる ὕδωρ ζῶν の付与者として、ἐγὼ εἶμι との自己啓示によって神と自らを同定する方であるという主張を、そこに見ることができる。さらに、旧約聖書における水に関する隠喩の考察により、いのちを与える水の隠喩は特に預言書において神ご自身や終末における祝福の時代のしとしての聖霊を指すのに用いられ、ヨハネ4章と福音書全体の文脈の考察から、ὕδωρ ζῶν は聖霊を指す隠喩であることが示された。

このようにヨハネ4章においては、ὕδωρ ζῶν の直載の意味とその隠喩的意味の間で生じるサマリアの女性の誤解を通して、彼女に終末における祝福の本質が伝えられるという文学形態がとられている。それは、初期ユダヤ教黙示文学に特徴的な、地上の事象を用いた「たとえ」によって天上の奥義（終末に関する神の計画）を啓示する形式である。イエスは、ニコデモの時と同様に、誤解を繰り返すサマリアの女性に対して、神の隠された奥義を啓示していたのである。

L. Schottroff は、人のうちで永遠のいのちへと湧き上がる泉になると約束されるイエスが与える水は、サマリアの女性の魂の渇きを満たすだけでなく、彼女は宣教によって同じ水をスカルの人々に与えたと理解する⁽⁵⁰⁾。しかし、彼女の宣教は水を直接与えることではなく、人類の渇きを満たす水として聖霊の付与者であるイエスを指し示すことであつた（4章29節）。

(50) L. Schottroff, "The Samaritan Woman and the Notion of Sexuality in the Fourth Gospel," F.F. Segovia, ed., *What Is John? Vol. II. Literary and Social Readings of the Fourth Gospel* (Atlanta: Scholars Press, 1998), 157-81, 168. Schottroff は、彼女は渇きからだけでなく、夫でない男への従属から信仰共同体へ解放されたと見なす。